

## 霊長類研究所

I 研究の水準 ..... 研究 30-2

II 質の向上度 ..... 研究 30-4

## I 研究の水準（分析項目ごとの水準及び判断理由）

### 分析項目 I 研究活動の状況

#### 〔判定〕 期待される水準を上回る

#### 〔判断理由〕

観点1-1「研究活動の状況」について、以下の点から「期待される水準を上回る」と判断した。

- 第2期中期目標期間（平成22年度から平成27年度）における英文の原著論文数は平均148.2件、英文の学会発表数は平均120.3件となっている。また、国際共著論文数の割合は、平成22年度の35.6%から平成27年度の44.2%へ増加している。
- 第2期中期目標期間の外部資金（受託研究、受託事業、科学研究費助成事業、寄附金等）は、間接経費等を含め平均約10億400万円となっており、そのうち、科学研究費助成事業は平均2億7,000万円となっている。
- 平成26年度「革新的技術による脳機能ネットワークの全容解明プロジェクト」を招致し、中核拠点の参画機関となっているほか、第2期中期目標期間に戦略的国際研究交流推進事業費補助金、若手研究者戦略的海外派遣事業費補助金等の大型プロジェクトに採択され、研究を推進している。また、文部科学省の研究開発施設共用等促進費補助金「ナショナル・バイオリソース・プロジェクト」を2件実施している。
- 一般向けに「京大モンキー日曜サロン」を開講するなど、社会へのアウトリーチ活動により、研究成果を広く発信している。

観点1-2「共同利用・共同研究の実施状況」について、以下の点から「期待される水準を上回る」と判断した。

- 共同利用研究（計画研究、一般個人研究、一般グループ研究、随時募集研究、震災関連研究（平成23年度から平成25年度））の採択件数は、平成22年度の98件から平成27年度の145件へ増加している。また、平成23年度からは随時募集研究として研究計画を通年で随時受け付け、共同利用研究希望者の利便性を図っている。
- 第2期中期目標期間における共同利用・共同研究による成果として、論文数は25件から80件、また、学会発表数は28件から138件の間を推移している。
- 第2期中期目標期間に共同利用研究会を合計35件を実施し、参加者は1,669名となっている。

以上の状況等及び霊長類研究所の目的・特徴を勘案の上、総合的に判定した。

## 分析項目Ⅱ 研究成果の状況

### 〔判定〕 期待される水準を上回る

#### 〔判断理由〕

観点2-1「研究成果の状況」について、以下の点から「期待される水準を上回る」と判断した。

- 学術面では、特に実験心理学、神経生理学・神経科学一般の細目において卓越した研究成果がある。また、霊長類の研究分野において、学会や霊長類研究者コミュニティから評価されている。
- 卓越した研究業績として、実験心理学の「知識と技術の世代間伝播の霊長類的基盤」、神経生理学・神経科学一般の「霊長類脳における遺伝子導入と神経ネットワーク解析システムの確立」がある。「知識と技術の世代間伝播の霊長類的基盤」は、チンパンジーとボノボによる野外研究と実験研究を組み合わせ、認知機能の生涯発達と知識・技術の世代を超えた伝播に焦点を当てることで、人間の認知機能の特徴を明らかにし、1研究室で年平均26件の原著英語論文が出版されており、インパクトファクター（IF）39の雑誌に掲載された論文のほかIF3以上の雑誌に掲載された論文は、年平均7件発表されている。
- 社会、経済、文化面では、特に実験心理学の細目において卓越した研究成果がある。研究成果の多くはマスメディアに取り上げられている。
- 卓越した研究業績として、実験心理学の「知識と技術の世代間伝播の霊長類的基盤」は、一連の研究成果と社会的貢献により平成25年度文化功労者として顕彰されるとともに、著書『想像するちから：チンパンジーが教えてくれた人間の心』は、第65回毎日出版文化賞を受賞している。

以上の状況等及び霊長類研究所の目的・特徴を勘案の上、総合的に判定した。

なお、霊長類研究所の専任教員数は37名、提出された研究業績数は5件となっている。

学術面では、提出された研究業績5件（延べ10件）について判定した結果、「SS」は4割、「S」は5割となっている。

社会、経済、文化面では、提出された研究業績2件（延べ4件）について判定した結果、「SS」は5割、「S」は5割となっている。

（※判定の延べ件数とは、1件の研究業績に対して2名の評価者が判定した結果の件数の総和）

## Ⅱ 質の向上度

### 1. 質の向上度

〔判定〕 高い質を維持している

〔判断理由〕

分析項目Ⅰ「研究活動の状況」における、質の向上の状況は以下のとおりである。

- 第2期中期目標期間における英文の原著論文は平均 148.2 件、国際共著論文数の割合は平成 22 年度の 35.6%から平成 27 年度の 44.2%へ増加している。
- 平成 23 年度から随時募集研究として、研究計画を通年で随時受け付け、共同利用研究希望者の利便性を図っている。
- 平成 26 年度「革新的技術による脳機能ネットワークの全容解明プロジェクト」を招致し、中核拠点の参画機関となっている。
- 平成 27 年度の文部科学省による共同利用・共同研究拠点の期末評価ではS評価となっている。

分析項目Ⅱ「研究成果の状況」における、質の向上の状況は以下のとおりである。

- 実験心理学の「知識と技術の世代間伝播の霊長類的基盤」では、1 研究室で年平均 26 件の原著英語論文が出版されており、IF39 の雑誌に掲載された論文をはじめ IF3 以上の雑誌に掲載された論文は、年平均 7 件発表されている。
- 「脳科学研究」では、効率的な遺伝子導入手法の開発、「ゲノム細胞科学」では、ゲノムや細胞の解析の新規手法の導入、「化石の研究」では新たな解析機器を利用し「第4原人」（澎湖人）の発見に至るなどの成果があり、これらはトップジャーナルに発表されている。

これらに加え、第1期中期目標期間の現況分析における研究水準の結果も勘案し、総合的に判定した。

### 2. 注目すべき質の向上

- 実験心理学の「知識と技術の世代間伝播の霊長類的基盤」では、1 研究室で年平均 26 件の原著英語論文が出版されており、IF39 の雑誌に掲載された論文をはじめ IF3 以上の雑誌に掲載された論文は、年平均 7 件発表されている。